

セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.14

編集 1986・9・30
発行 佐賀県立九州陶磁文化館
代表者 久間 三郎
〒844 佐賀県西松浦郡有田町中部字田ノ平乙3100-1
電話 09554-3-3681
印刷所 山口印刷株式会社
佐賀県伊万里市二里町甲2476-21



そめつけさんすいもんぼち 染付山水文鉢

館蔵（今泉吉郎氏寄贈）

有田・山辺田窯

17世紀後半

口径39.4cm 高さ10.1cm

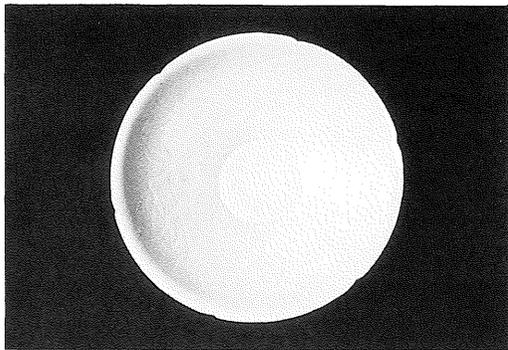
高台径21.0cm

口が外反りに開いた大振りの鉢。胴に42条の鐫^{しほ}があり、この作品を特徴づけている。ロクロ成形後、型にかぶせて形を仕上げたものである。見込みにはのびやかな筆致で、日輪山水に泊船を描き、そのまわりに如意頭を組み合わせた木瓜状の輪と唐草文様を描く。口縁と外側の胴中央にも唐草文様をめぐらす。高台内には目跡が二点残っている。この作品と同意匠の陶片が山辺田窯から出土している。

昭和61年度特別企画展

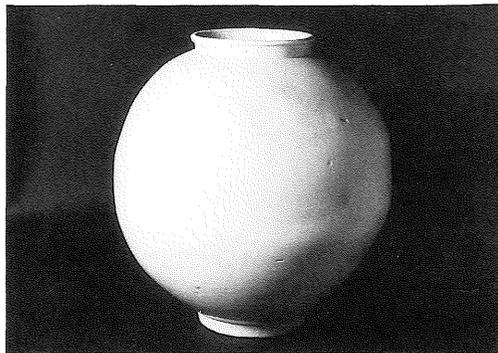
「白磁の美」から

今秋10月11日から開催される「白磁の美」展について、出品作品からいくつか選んでご紹介します。



1. 白磁唐草龍文輪花鉢 定窯
北宋時代(11~12世紀) 大阪市立美術館蔵
口径22.5cm 高さ6.6cm 底径6.8cm

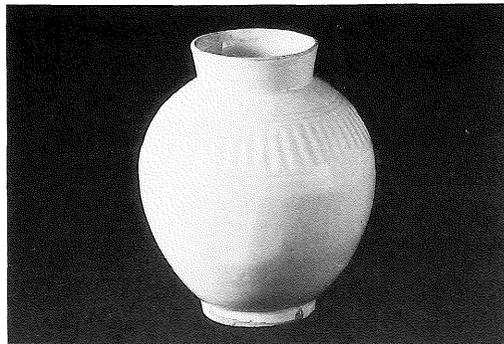
典型的な定窯白磁である。胴部はややふくらみがあり、口縁は端反りで6つの輪花に切る。見込みに団龍、内面に花文と唐草の文様を片切彫りと線彫りの併用で施す。釉は透明度が高いが淡黄色で、素地は緻密で白粉ぎみ。畳付の釉はかなり薄いが施釉されており、口縁は釉剥ぎで伏せ焼きと考えられる。



2. 白磁大壺
李朝時代(18世紀) 三好記念館蔵
口径14.0cm 高さ35.4cm 底径13.3cm

李朝独特のふっくらとした柔らかい印象の大壺である。成形時の歪みにより曲線が微妙に変化し、形態に温雅な趣きを与えている。焼きはやや甘く、素地は淡茶色がかかり、釉は失透ぎみの淡青色で全面に細かな貫入がある。また釉ムラが各所にみられる。畳付はほと

んど無釉だが目砂が付着している。内面の釉は外面よりやや薄目にかけている。また内面の中ほどに継ぎが跡らしき段があり、この大壺は上下の合せ継ぎによると考えられている。



3. 白磁鑄文壺 有田
江戸前期(17世紀前半) 個人蔵
口径8.7cm 高さ19.3cm 底径8.0cm

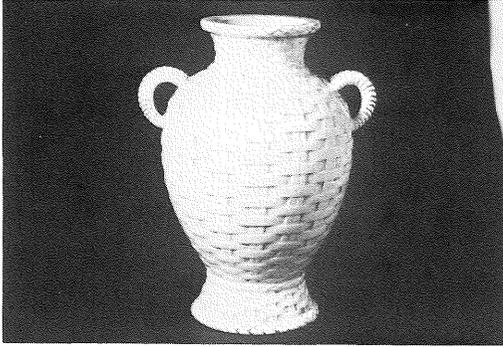
寛永期(1624~44)の壺によく見られる形態である。染付をともなう壺は多いが、白磁だけというのは少ない。畳付、高台内ともに無釉で、高台外側には施釉時の指跡が残る。本来蓋付と思われる、口縁上面と内側は無釉である。内部は施釉されている。また内部側面には下から12段ほどのロクロ目がある。肩には彫圈線と鑄ぎ文が施されている。釉調はいかにも初期伊万里ふうの失透性淡青色で、しっとりとした趣きである。



4. 白磁亀竹形掛花生 三川内
江戸後期(19世紀) 松浦史料博物館蔵
口径11.7cm 高さ30.5cm 底径13.4cm

竹形の掛花生から亀が浮び出てくるような構図をとっている。竹も亀も富士壺も写實的に作られ、その精巧な仕上げと組み合わせの妙が、この作品を一種独特なものにしている。上方の輪部は内側を鋸歯状に突起させており、生花を支えるためと思われる。素地は白く

釉溜は淡青色を帯びる。底部はすべて無釉であり、畳付に縞状の削り跡、高台内に4つの目跡がある。箱書に如猿作とあるが、如猿こと3代今村彌次兵衛は享保2年没であり、本品はその後の時代の作と思われる。

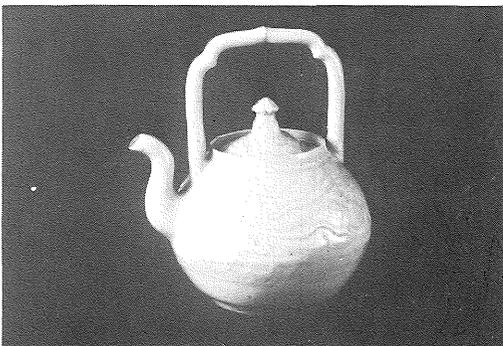


5. 白磁網代文耳付花瓶 薩摩・磯窯

江戸末期（19世紀後半） 黎明館蔵

口径12.0cm 高さ31.4cm 底径13.5cm

白磁胎に白薩摩の釉がかけられている。白薩摩の素地は確かに白いが陶器であり、この花瓶の方は透光性こそあまりないが、磁器の中に収まるべき白さと硬さを有している。釉は貫入の多い透明性の淡黄緑色を呈す。底部は畳付、高台内ともに無釉。内部施釉でロクロ目が残る。網目文は手彫りによる。磯窯は安政2年（1855）に島津家の磯別邸に築かれた窯で、洋食器の試作や洋絵具の実験など様々な試みがなされている。白磁胎に白薩摩釉の組み合わせも、こうした新しい試みの一環と考えられる。



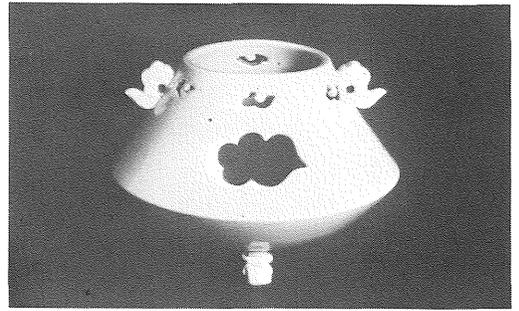
6. 白磁鳳凰文水注 京都・青木木米作

江戸後期（19世紀前半） 京都国立博物館蔵

高さ13.2cm

京都の白磁は意外に少なく、名工の中でも青木木米しか確認できなかった。木米作の中では白磁荒磯文水注（京都府立総合資料館蔵の出品物）が代表作である

が、この水注も木米の技量を示すものである。蓋裏は無釉で布目が残りに、小判形の印銘がある。注口、把手、胴部はそれぞれ押型成形による。また胴部に上下の継ぎ跡がある。内部と底部は無釉。非常に薄い作りである。素地は灰色がかり、先の荒磯文水注が純白であるため、陶土を使いわけたと思われる。木米は明和4年（1767）生まれ、天保4年（1833）没。

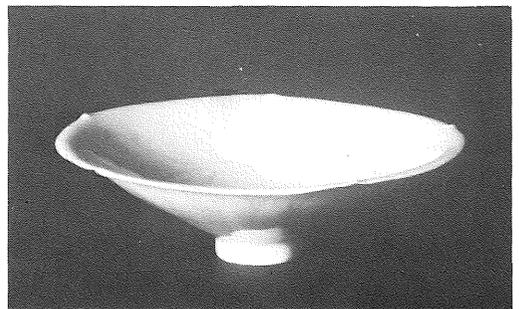


7. 白磁風炉 美濃・妻木

江戸末期（19世紀後半） 個人蔵

口径13.2cm 高さ18.0cm 底径13.5cm

美濃の磁器生産は文化年間（1804～18）に始まるとされるが、白磁は瀬戸と同じく極めて少ない。この白磁風炉は妻木の旧家に伝世するもので、同家に残る古文書から嘉永5年（1852）の作と推定される。文書は図入りの注文書で、縦8寸、横8寸とある。横は注文どおりの寸法であり、縦は蓋がない分だけ小さいと考えられる。三脚の畳付は施釉で内部の下半無釉。釉溜は淡青緑色、素地は緻密で白いが釉際は赤茶色を呈す。



8. 青白磁花文碗 美濃・塚本快示作

昭和59（1984）年 個人蔵

口径17.7cm 高さ5.6cm 底径3.8cm

塚本快示は現代の白磁作家を代表する陶芸家である。大正元年岐阜県土岐市生まれ。昭和58年に塚本の白磁・青白磁の技術は、国の重要無形文化財として認定された。定窯ふうの白磁や景德鎮ふうの青白磁に特色あり。

〈速報〉

有田町楠木谷窯跡の調査

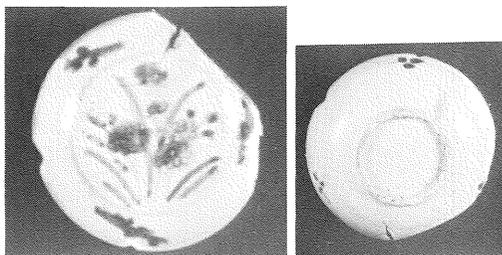
本年の国庫補助事業肥前地区詳細分布調査の対象として、17世紀の記録である『山本神右衛門重澄年譜』、柿右衛門家文書「覚」、『承応2年万小物成方算用帳』にみえる有田皿山の窯場の一つ、「年木山」に注目し、その窯場に属すると推測された楠木谷窯跡（有田町泉山）の発掘調査を去る6月に実施した。窯跡はすでに宅地化が進み、窯尻とみられる山際付近が畑として残っているにすぎなかった。

調査の結果、窯の焼成室一つと窯の外側に並走する排水溝を発見した。焼成室内には廃窯後に崩落した窯壁が充満しており、それを取り除くと窯床面から白磁中皿10個体分以上の破片とトチン（窯道具）1点が出土した。よって廃窯直前に白磁中皿が焼かれたことが知られる。発見された焼成室は南北方向の長大な階段状連房式登窯のうちの上部の1室と推測される。

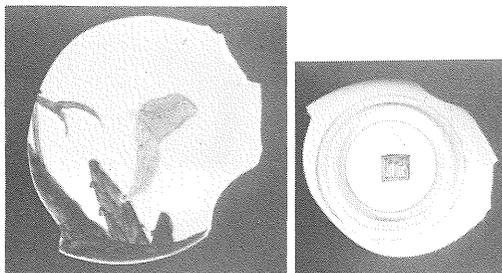
この焼成室の東側の調査で物原（失敗品などの捨て場）が検出された。物原の堆積は比較的薄く、出土した製品の内容からみると短期間操業の窯と思われる。製品は小皿を主とし少量の碗がある。小皿は高台径の割合が小さく、17世紀前半の小皿の器形に近いものが多いが、なかに高台径の割合が大きく、ハリ支えによる薄手の小皿（図2）や糸切細工による付高台の小皿（図3左下）のように、1650年代から始まる特徴がみられる。両者には年代差がそれほどないと思われ、前者から後者へと漸次変わる移行期に当る窯と推測される。すなわち操業期間は1650年代を中心として1640年代から60年代のうちにおさまるとみられる。

注目されるのは、皿類が長吉谷窯や柿右衛門窯の初期とみられる皿類との共通性が多く、優れた製品を焼造していることである。ソーム・ジェニンス『日本磁器』1965・ロンドンの図8の皿と同様の型打文の口縁部が出土しているほか、三好記念館蔵「色絵丸文瓢形皿」（同館図録110）の型打文と丸文の染付部分を有する小片が周辺から採集されている。

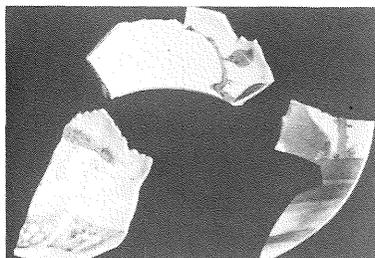
窯道具も長吉谷窯・柿右衛門窯などで用いられた輪積成形の桶胴形サヤが目立つことが指摘でき、この窯が1637年における窯場の整理・統合事件以降の窯であり、1660年代までには廃窯になったと推測されることは、有田皿山における1650年～60年代の窯場の西遷・



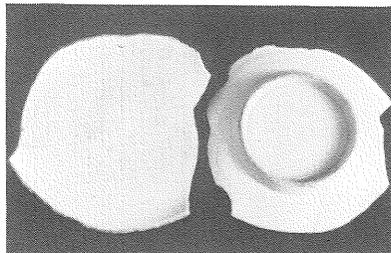
1. 染付草花文皿
物原Ⅱ層出土 口径13.3cm 高さ3.7cm 底径6cm



2. 染付筒文皿
物原Ⅲ層出土 高さ2.6cm 底径8cm ハリ跡あり



3. 染付皿
物原Ⅱ層出土 左下短径8.2cm 付高台



4. 白磁皿
窯床面出土 右 底径7.8cm 左は内面

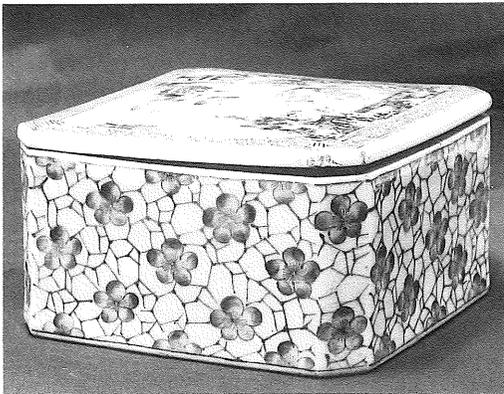
再編成の動きに関連するものとみられて興味深い。すなわち有田皿山の東部に位置した百間窯、ダンバギリ窯（以上坂ノ川内山）、小樽2号窯（小樽山）、楠木谷窯（年木山）が廃絶し、西部の柿右衛門窯（下南川原山）が新たに興るのである。この窯場の西遷が海外輸出などに関わりがあるのかどうかや初代柿右衛門が色絵創始の折に居た年木山と本窯との関わりなどについては今後の資料の増加をまって考えたい。（大橋康二）

シリーズ

やきものに見る文様 (12)

氷裂文様

氷裂文様は氷がひびわれたように、大小不規則の三角形、四角形、五角形、ときには六角形で分割された文様である。氷裂文様はまた氷竹文様ともよばれる。中国では家具、建築などに広く応用されている。有田皿山の製品では江戸時代後半の皿によく描かれている。大皿の中央に立鶴を描き、その周囲に氷裂文様を配している作品がある。また大皿の中央に富士と松を描き、その周囲に氷裂文様を配しているものもある。ここに紹介する「染付唐人文蓋物」は長崎の亀山窯の製品である。外側の胴一面に氷裂文様を描き、その上に梅花文様を散りばめている。氷裂文様と梅花文様のとりあわせは有田樋口窯出土の陶片（18世紀～19世紀）にもみられる。



染付唐人文蓋物
長崎・亀山窯 19世紀後半

やきものの表面を注意深く観察すると、釉が無数にひびわれているのがみえる。このひびわれは貫入とよばれ、それは素地（胎土）と釉の収縮率の違いによっておこる。一般に釉は素地よりも収縮率が大きく、したがって釉は素地より縮みやすいため、ついには釉がさけてひびわれる。窯からとりだされたばかりの製品は冷えるにつれてびんびんと音を出して釉がひびわれていく。このときに、たとえば墨汁の中に製品を浸すと、そのひび（貫入）にそって墨がにじんで氷裂文様をあらわすことができる。このようなひび文様で有名な作品に中国南宋時代の郊壇官窯の青磁がある。その文様は自然が描いた見事な氷裂文様といえるだろう。

(吉永陽三)

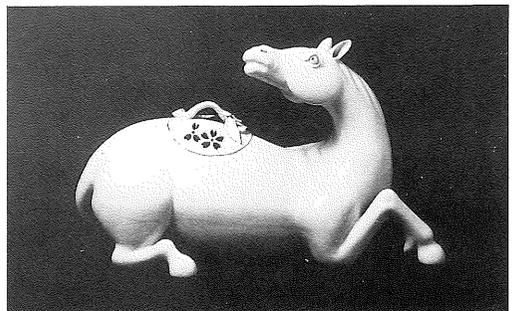
シリーズ

やきものの技法 (12)

押し型成形

凹形の型に粘土を指で押しつけて成形する技法。内型成形や型押し成形などとも呼ばれる。型を用いる技法を総称して型成形というが、凸型にかぶせる方法と凹型に押しつける方法に大別される。凸型、凹型ともに器を変形させたり、陽刻文など複雑で手間のかかる文様を量産するのにむいている。凸型は器の内側が型に接し、文様がほどこされる。凹型の場合は器の外側が型に接するため、器の外側に文様ができる。ただし、器の内側には押えた指跡や凹凸がのこる。そのため凹型による押し型成形は器にはほとんど用いられない。近代になって凹型を用いた機械ロクロが普及し、凹型による器も多く作られるようになるが、ここでいう押し型成形とは区別される。機械ロクロによる凹型は、回転している凹型に上から金属のコテをあてて中の粘土を押しひろげ、器の内面がきれいに仕上げられる。押し型成形は、基本的には指で型に粘土を押しつける方法である。

押し型成形は内側に押さえ跡が残りやすいので、製品は内側が見えないようなものが多い。水滴、人形、水注や水注の把手などいずれも外面に陽刻文などが施され、しかも内部は中空である。この場合1つの凹型ではなく、2つの凹型を用いて継ぎ合せている。3つ以上の型を用いることもあるが、2つの型を用いて成形し、後で各部分を接合して複雑な形態を作り上げるのが一般的である。



白磁馬形香炉 三川内焼 江戸後期 個人蔵

写真の馬形香炉は頭部、胴、4肢、尾は個別に凹型で作られ、後に接合されている。胴の横位置に継ぎ跡がのこり、押し型成形の合せ型とわかる。

(鈴田由紀夫)

〈企画展より1〉

新 収 蔵 品 展

7月22日(火)から8月10日(日)まで、当館の第1展示室において、「新収蔵品展」を開催しました。この「新収蔵品展」は当館が昭和60年度に購入または寄贈をうけた資料を公開、展示するもので、昨年につづき今年が2回目となります。

展示内容は、古唐津や伊万里など肥前の陶磁器が37件、薩摩など肥前以外の九州の陶磁器が28件、幕末一近代の陶磁器、近代一現代作家の陶磁器など15件で合計80件が展示されました。

昨年は沖縄の陶磁器57件が収集の特徴でしたが、今回は薩摩の陶磁器27件が一括して収集されたのが大きな特色といえます。超一級の名品というわけでは無いけれども、各窯各種の陶磁器が網羅的に含まれているので、重要な資料といえるでしょう。また肥前の陶磁器が37件と多いのですが、この中には京都市在住の井村幸裕氏より寄贈された古伊万里など9点をはじめ15点の寄贈資料が含まれ、また61年度の特別企画展「白磁の美」のために収集した白磁資料4点も含まれており、多くの方々に観覧いただきました。



〈企画展より2〉

第23回陶磁器試験研究機関作品展

8月19日(火)から24日(日)まで、当館の第1展示室において、「くらしとやきもの 第23回陶磁器試験研究機関作品展」が開催されました。主催は財団法人日本陶磁器意匠センター、財団法人日本産業デザイン振興会、共催は有田町、大有田焼振興協同組合、佐賀県窯業試験場、佐賀県立九州陶磁文化館です。

タイトル“くらしとやきもの”が示すとおり、食器や食卓用器、インテリア用品など、各機関の研究テーマによる試作品、指導製品など90件が展示されました。各機関において、素材や技法など、その地域の特徴を生かした作品が出品され、岐阜県陶磁器試験場の提案した単身生活者のための食器や、岡山県工業技術センターの伝統的な備前焼の焼味の窯変を活かした各種作品、愛知県瀬戸窯業技術センターの指導した、ユーモラスな磁器製の唐子の姿の陶枕、佐賀県窯業試験場の“やり貝シリーズ”と称された遊び感覚のあるコーヒーセット等、楽しさとバラエティに富んだ作品が並び人々の目をひきました。そして一般の観覧者にまじって業界関係者も多数訪れ、熱心に作品に見入っていたのが印象的でした。



利 用 案 内

開 館 午前9時～午後4時30分 月曜休館 年末年始休館 12月28日～1月4日
 観覧料 一般150円(100円)／大学・高校生100円(70円)／中・小学生50円(30円)／()内は20人以上の団体料金。但し、特別企画展の場合は、その都度別に定めます。
 交 通 佐世保線有田駅下車徒歩15分